

奈文研は昼夜のサッカーが盛んで、入所すると、何よりもまず足の大きさを聞かれる、というまことしやかな噂を耳にしていたが、私の場合は、なんのまえふりもなく突然、「お前は青だな」であった。これは予想外のことであって、サッカーのチーム分けで青チーム、ということを理解するまでにいささかの時間を要したことは言うまでもない。また、3ヶ月にも及ぶ発掘現場を乗りきる体力を養うためにも、昼夜のサッカーはもってこいであるとも言われた。入所2年目から3年目にかけて、平城で1～3月、現場班の編成替えで引き続いて4～7月、さらに、飛鳥藤原へ異動して12～3月と、数多くの発掘現場を経験することができたのも、きっとサッカーをしていたおかげであろう。もっとも、サッカーでは、おでこを切ったり、頭を縫ったり、いろいろとお騒がせしたのであるが…。思えば、それぞれ前厄、本厄の年であった。因みに後厄の年は、奈良市へ異動したので、怪我する機会は失われた。

奈文研では、何度か出入りした平城が一番長かったのであるが、いずれも、土器を避けた異動であった。入所して新人研修を受けていた頃に、「お前、土器の図…、まあ、ええわ」と言ったT部長の一言が思い出されるのである。それはともかく、もともと、それほど器用でもないので、自分でやってみることが好きで、学生時代にはタガネを作り、遺物と同じように、文様を彫ったり透彫をしたりしていた。そういうわけで、奈文研で飛鳥寺出土挂甲の復原に携わることができたのは、望外の幸せであった。また、弓矢を作り飛ばすこともした。実際に作ってみると、頭の中で考えていた通りにはいかないことが、逆に思いもよらないことがわかつたりすることがあり、結構「どきどき、わくわく」しながら進めたものである。

こんなことを書き続いていると、今度は「お前、研究所の仕事…」と言われそうである。「まあ、ええわ」と言ってお許しをいただきたい。30年間、お世話になりました。（企画調整部長 小林 謙一）

私がしてきた仕事

70年安保闘争など学生運動のうねりの中で、新たな世界を展望する歴史学への思いを抱きつつ奈文研に入所してから、38年が過ぎる。その間、私が携わってきた仕事の一つに、官衙遺跡発掘技術の向上と

情報の共通化の推進がある。それは第一に、1970年代以降に官衙遺跡の発見例が増加し、その調査研究が注目され始めたこと、第二に、柱穴をいきなりの半截・完掘して貴重な情報を抽出できていない現場が多かったこと、第三に、最新の知識・技術や調査成果が共有されず、発掘方法や遺跡の保存対策に苦慮している状況があったからだ。

こうした状況を改善すべく、官衙研修や調査助言、情報のデータベース化と公開、『古代の官衙遺跡』の編集などをおこない、また、古代官衙・集落研究集会を通じて、各地の調査員や研究者との情報交換やネットワークの構築なども図ってきた。このように、文化財行政に資する研究課題を自ら設定し、それに取り組める環境を与えていただいたことに感謝したい。

官衙遺跡はなかなか自らの正体を明かしてくれない。その正体を見破る万能試薬の調合もままならないから、遺跡の性格を早く的確に判断することは容易でない。一方、そのようにやっかいな遺跡だけに、官衙関係遺跡との対話は、謎解きや未知との遭遇という楽しさを味わえる世界でもあった。また、官衙遺跡は律令国家の成立や変遷を探るうえで重要な位置を占めているから、学生時代に抱いた歴史学的国家論などへの熱い思いを呼び覚ましてくれる機会でもあった。その意味では大切な人に巡り会ったようなものだ（奈文研では、人生の伴侶となる人にも巡り会っちゃったのだが）。

この仕事は、諸先輩が培ってこられた資産や同僚など皆様の協力のお陰で進めることができたことは言うまでもない。しかし、奈文研の資産に38年間の利息を付けて恩返しできたのか、甚だ心もとない。

膨大な集落遺跡の資料を歴史資料として生かし、その発掘の意義を市民に示すことなど、国内にも文化財行政に資すべき研究課題は山積していると思う。今後は皆様のご活躍を一市民として見守りたい。

（文化遺産部長 山中 敏史）

四十年と、ちょっと。

「お帰り」と、憶えていてくれる人もあるって、2007年4月、わたしは20年ぶりに「奈文研」に帰ってきた。庁舎も築何十年の貴様に、ますます風格を増し、「まだ、そのままやったんやなあ」と、それにも妙な感懷があつたり、あのころは会計課といった